論叢現代文化・公共政策　2005 Vol. 2 pp. 159 - 162

書　評

藤田　玲子

A History of the University of Cambridge Volume II: 1546-1750

By Victor Morgan (general editor- Christopher Book), Cambridge U.P., 2004, 611pages

本書は、最新の「ケンブリッジ大学史全4巻」(*A History of the University of Cambridge* 4 Volumes) 中、長らく待たれていた最後の第2巻であり、ついに全巻が完成した。今回の同大学史の編纂プロジェクトは、カレッジ史の寄せ集めや、大学及び関連機関所有の記録を集積した年代記ではなく、大学を一体のものとして、その歴史的意義を問うことを目的として始められた。これは、ほとんど最初と言っても良い画期的な試みである。それは、17世紀以降、イギリスの歴史は、一国もしくは地域的なものではなく、広大な植民地建設、産業革命、アメリカ合衆国の独立等を通じて世界史の主要な部分となっていくが、その中で大学の果たした役割は他に類をみない。本書はその発端となった16世紀のケンブリッジ大学の問題を中心に扱っている。また、最新の「オックスフォード大学史全8巻」(*The History of the University of Oxford* 8 Volumes, general editor - T.H.Aston) がすでに完成しているため、歴史の各時代、両大学の状況を比較することが出来る。尚、「オックスフォード大学史」の第3巻と4巻がほぼ本書と同時期を扱っている。

第2巻は第1巻(*Volume I: The University to 1546*)とセットで読まれるべきである。本書は、ヘンリー8世死去の前年、1546年から1750年までを扱っているが、これはいささか無理があると言わざるを得ない。現在、その長い歴史と輝かしい学術的成果によって、名声を享受しているケンブリッジ大学であるが、これは主に17世紀以降に関わることであって、中世から16世紀までの同大学は別物と考えるべきであろう。転換点は、本書が主要な部分として扱っている16世紀であり、著者は第1章の冒頭で、A fundamental theme in the history of the University of Cambridge in this period is the intimacy between the university and the state、と明快に述べている。従って、1750年までの期間、すなわち、ニュートンを始め、優れた科学者を輩出する王政復古後の時代まで扱うのは焦点が曖昧になってしまう。これについては、著者も問題を認識しているが、前記の「オックスフォード史」ほどの規模ではないため、こういった欠点があるのは止むを得ないとしている。

イングランドの大学は16世紀から、中世、ヨーロッパ大陸各地に設立された大学とは異なる方向に歩み出す。第1巻で説明されているように、大学の起源は、12世紀、

商業都市の発達によって必要となった専門職の人材を養成するために、出現した学校の一つと考えられるが、当初、イングランドの大学も大陸のものと大差はない。ただ、なぜ他の国々のように首都や大都市ではなく、中規模の都市であるオックスフォード市やケンブリッジ市が設立の認可を得たのかは不明であるが、一つ明らかな事実は、4つの主要な托鉢修道会、アウグストス、ドメニコ、フランチェスコ、カルメル、の修道院が存在したことである。ヨーロッパの大学の設立期とほぼ時期を同じくして、中世キリスト教世界の重要な事件の一つである托鉢修道会が出現するが、大学のメンバーには多くの托鉢修道士がいたと考えられる。ナポリ大学を設立したドメニコ会のような直接的なケースではないにしても、イングランドの大学においても両者の関係は明らかである。当初、各地から集まってくる学生たちの宿泊施設として始まったカレッジの建物も修道院所有のものが多く、16世紀の宗教改革による修道院の解散で、大学は深刻な影響を被ることになる。第2巻はその後の極めて困難な時代の大学を扱っている。

16世紀は言うまでも無く宗教改革でヨーロッパが二分されるが、厳密に言うと、三分されたともいえる。イングランドは独自にイギリス国教会を創設したからである。キリスト教の超国家的性格からすると、一国独自で国教ともいえる宗派を設立すること自体、大きな矛盾を抱えることになる。しかも、プロテスタント派への帰属は、大陸で繰り広げられた神学上の対立によるものではなく、ヘンリー8世という、ひとりの専制君主の離婚という個人的事情によってなされ、さらに16世紀後半、政治的判断による大陸からの分離政策が一層進む。中世からカトリック教会との深い関係をもっていた大学は複雑な立場に追い込まれることになるが、本書は、このような状況下で、前記に引用した著者の言葉が示すように、大学と国家の密接な関係がどのようにして形成されていったのかを解き明かしてくれる。全16章を主要な観点から整理すると、以下のようになる。

カレッジの修道院解散の影響と施設の継承 — 1，2章

国家による大学統治の実態と宮廷政治の露骨な干渉、それに伴う大学内部の権力争い — 3，4，5、10、11章

大学と地方（country）との結びつき、その恩恵 — 6，7章

カレッジ組織の形成、その独立性 — 8，9章

カリキュラム、教育内容の変化、科学研究の発展 — 12，14、15章

清教徒革命期の大学 — 13章

エピローグ — 16章

扱われている期間は、ヘンリー8世の末期から、エドワード6世、カトリックへ回帰したメアリー1世、エリザベス1世、ジェイムス1世に始まるスチュワート朝、清教徒革命の混乱とその後に及ぶ。最も重点が置かれているのは16世紀後半から17世紀

前半である。本書のように、膨大な記録と関連資料に基く文献的性格の書物の場合、それらを精査しどのような項目で構成するのかという点に、著者の意図を読み取るべきであろう。上記に各章をテーマ別に分類したが、著者は、第1巻との整合性を念頭に置きつつ、組織としての大学が、最も困難な16世紀を生き延びたのみならず、17世紀以降の繁栄の基盤作りに成功した原因を分析することを本書の主たる目的としていると考えられる。これは、本書を読む者の最大の関心事と合致している。大陸が宗教戦争で混乱する中、プロテスタントとはいえ孤立主義を選択した不安定な国家と、カトリック教会の力に頼れなくなった大学とは、双方が互いを必要としていたように見える。政府にとって、カトリック教会の支配から抜け出した大学の統治に関わることは国家の利益に叶うことであるし、幅広い人材の供給源としての利用価値も極めて高かった。大学の側は、第一に存在そのものへの庇護が必要であった上に、結びつきの強化によって政治的な特別待遇、財政的なプラス面、卒業生への職の供給等、有形無形の恩恵がもたらされた。特に興味深い点を挙げると、8及び9章で、各カレッジは中世的家父長制の構造を保ちつつ、貴族学生の流入という新たな事態に、待遇、カリキュラム等で対応し、それを逞しく活用することで基盤を確立していったことや、12及び14章で、近代的に変貌していく過程でも、その教育内容とも関連しつつ、大学は国家と教会との結びつきを益々強めていくように見える等である。ここで、一つ、強く望まれたのは、そういった状況下で、16世紀以降、学生たちが卒業後どのような職業に就いたのか、また、それ以前と比較して職種にどのような変化があったのかについて、一章を設けることである。実際、前記の新たな状況によって、卒業生の将来が影響を受けたことは明らかである。シェイクスピア活動期に、大学卒業者が宮廷や国教会とのつながりによって、様々な仕事を行ったことは良く知られている。また、6及び7章で詳細に説明されているように、国家の庇護による行政上の特権や自由を獲得していく一方、大学に子弟を送り出す地方（country）のジェントルマン層の強固な基盤が形成され影響力を増していくことで、イギリスの社会が変化していく。職種の変化は、中世と近代の大学の変化を、社会との関連で把握できる点で大いに有効だったはずである。

国家の指導層を養成する高等教育機関が、その卒業生との関係から、国家の中枢と結びつく例は古今東西珍しくない。しかし、イギリス史の知識を持って本書を読むと、イギリスの特殊な宗教改革は国家統治の中に教会を含めたことによって、国家、教会、大学が密接な関係を持つに至るが、これは単なる結びつきではなく、次第に国家政策の一部となり、人材育成や学術的貢献の範囲を超えて、後の大英帝国の体制を支えていったことが、明確になる。この点では影響は国際的なものである。また、大陸では中世以降も大学の設立が続いていく一方、なぜ、イングランドでは19世紀まで、国家がオックスフォード、ケンブリッジ大学の2校のみに独占権を与え、他に設立許可

を与えなかったのかという疑問にも解答が得られる。

大陸の大学は、戦争や政治体制の変化等で、建物の場所が移動したり、資料や文献が公文書館で保存されている例も少なくないが、イングランドではカレッジの管理のもと、現在まで全体的に良く保存されているので、今回の「大学史」が目指したテーマは今後さらに研究が深められていくだろう。